

姥  
櫻

三百年前、伊豫國温泉郡朝美村に徳兵衛と云ふ人があつた。この徳兵衛は郡第一の長者で村では名主であつた。大概の事には幸運であつたが四十になつても未だあとを取らすべき子寶がなかつた。それを歎いて彼は妻と共に朝美村西法寺と云ふ名高い寺の不動明王に願をかけた。

遂に願がかなつて、徳兵衛の妻は娘を生んだ。綺麗な子であつた。それから名を露とつけた。母の乳が足りないため、お袖と云ふ乳母を雇つた。

お露は生長して大層綺麗になつたが、十五の歳に病氣になつて、醫者の力も及ばなくなつた。その時、實の母同様に、お露を愛してゐた乳母のお袖は西法寺に詣でて、熱心に娘の病氣平癒を不動様に祈願した。三七日の間毎日參詣して祈つた。その満願の日にお露は急に全快した。

徳兵衛の家では上から下まで大喜び、そのお祝に親戚友人を招いて宴をはつた。しかしその宴會の夜、お袖は突然病氣になつた。それから看護してゐた醫者は、翌朝臨終が迫つて居る事を通知した。

そこで悲歎にくれた家族は訣別のために床の周圍に集まつた。しかし乳母は云つた、

『皆様が御存じのない事を申上げる時が参りました。私の願が届きました。私は不動様に御祈りして、お嬢様の身代りになるやうに願ひました。それが有難くも許されました。それ故皆様、私の死ぬ事を悲しんで下されてはいけません。……しかし私に一つ御願がございます。私はお嬢様の病氣平癒の際、西法寺の境内に、御禮と記念のために櫻を一株奉納する事を、不動様にかたく誓ひました。今私は自分でその樹をそこへ植ゑる事ができません。それで私に代つてその誓ひをはたして下さるやう、御頼みいたします。……さやうなら、皆様どうか覚えてゐて下さい。私はお嬢様のために死ぬ事が嬉しうございます』

お袖の葬式のあとで、この上もなく立派な櫻の若木を、お露の両親が西法寺の庭に植ゑた。樹は生長して繁茂した、翌年の二月十六日——お袖の命日には、見事に花が咲いた。それから二百五十四年間——毎年二月二十六日に——續いて花が咲いた、——その花は紅色と白とで、丁度乳で濕つた女の乳房のやうであつた。それで人はそれを乳母櫻と呼んだ。

(田部隆次譯)

*Ubasakura. (Kwaidan.)*